

郷土はんのう

第20号



これまでに発行された19号までの「郷土はんのう」

- ◆『郷土はんのう』のあゆみ ……2頁～8頁
- ◆『ふるさと漫録』の出版(西村一男) ……5頁
- ◆飯能の刀工・小林英道(岡野達雄) ……2頁
- ◆郷土史おもしろ問答 ……6頁
- ◆やきものの粘土について(岸道生) ……3頁
- ◆郷土史研・新年度の事業計画 ……7頁
- ◆わが家の節分風景(吉田敏子) ……4頁
- ◆郷土館だより(お知らせ) ……8頁

飯能の刀工・小林英道

岡野達雄

「久須美のいっこく鍛冶屋」と聞かれて、きちんと答えられる人ならば、それはよ程飯能の好きな人にちがいない。

これは、幕末から明治への激動の時代、魔刀令が出され社会から刀が徐々に消えていった中で、あえて刀作りを断念し、野鍛冶への情念をよめた小林英道(てるみち)のことである。

だから世間の目にも気にしては生きたいでない。常に言動に気をつけていたのでは、良く切れる刃物は作れない。情念と感性との長いつき合いのうちに、個人の生活を演出していったその人である。

英道は、天保十二(一八四一)年、武蔵国多摩郡長岡村、清水儀平の四男として生まれた。

十五才の時、親類先で飯能町久須美の鍛冶小林敬之助に弟子入りし、その技量をみこまれて養子となった。

二十一才の時、養父で下野国鹿沼の細川正義を頼って修業を出たが、既に他界。やむなく正義の子、正守の紹介で川越藩士藤枝太郎英義の弟子になったという。

当時英義は三十八才の壮年最盛期。川越と江戸をしきりに往

復するうちに、数多くの仕事を

例えは、若名工の南海太郎朝尊

は「当令江戸無敵の上手也、未だ壮年に付鍛練妙所に至るの鍛冶家なるべし」と大いに賞賛している。

とにかくこの頃は、日本周辺にあらわれた外国船の影響が大きく、大きな黒船と日本の千石船の技術的ギャップが、誰にも理解困難な時であった。川越藩も湾岸警備が滞ってきた時、英義は藩命で「刀、難刀、長巻」

各二百振りを鍛練したというのだから、一門あげての大事業であり、その腕前が大いに問われた時代だった。

慶応二(一八六六)年、川越藩は前橋へと移る。

◆

飯能へ戻った英道を援かく迎えた人たちに、義叔父で細川一門では英義の相弟子という小林重吉がいる。また金工の落合寿親と英道の交友を物語る品が数多く残されていることから、郷里での英道には鍛冶仕事に胸を弾むものがあつただろう。ところが飯能戦争が勃発。明治九(一八七六)年には、これまで強制力のなかつた魔刀令に

継続は力、さらなる前進を

飯能市郷土史研究会会長

坂口和子

昭和五年七月二日。郷土はんのう創刊号の日付です。四八年十二月に郷土史研究会が発会し、五年のうちに企画編集されて

います。温故知新(のもの)として、飯能の大地に息づく歴史的事象を掘りおこしている。飯能が歩んできた径、その系譜をひく私たちの物語を述べている

こと、と今はなき赤田健一さんの編集後記です。以来平成十二年の二〇号まで、休むことなく郷土史研究の成果が発表されています。

いま二〇回の合本を開いてみ

かわり、庶民の帯刀禁止が出され、旧弊を打破する風はさらに加速した。

これ以降、英道は鍛刀をあきらめ、山林伐採用のオノ、マサカリ、ナタなどの鍛造に精魂を傾けたという。

とにかく性格は非常に剛直を極め、腹にためこんだ不機嫌をいちどにぶちまけるような強烈な人だったことから、「いっこく鍛冶屋」と近所の人々に呼ばれたそうだった。ただ一見荒っぽい英道も、仕事が一段落すると、大野に飼っていた黒牛を引いて野山に出かけて、笑顔でもどって来たとき聞く。

もし刀工に情念型があるなら、英道の作り手へ寄せる気迫は明らかに、当時の自己体験を映したもので、情念を刀の中にこめて

いる。

大正十二(一九二四)年、八

特集
創刊20号記念

『郷土はんのう』のあゆみ

私たちが「飯能郷土史研究会」の発会式は二十七年前の昭和四十八年十二月十五、新装成ったばかりの市役所五階大会議室で行われました。初代会長には加藤一氏が選ばれ、会員六十名のスタートでした。そして会の機関誌として本紙「郷土はんのう」の発行が決められたわけです。創刊号は昭和五十三年七月に発行され、以来二十号に至る現在まで会員間の血脈となるべく発行を続けてまいりました。次に二十号という記念すべき紙面作りにあたり各号の概要を掲載、ご参考にご供することとしました。(編集部)

会報「郷土はんのう」
各号の紙面を見る

◆創刊号(昭和五十三年七月)
表紙写真 大正六年の消防大会堂(山口正子氏提供) 題字揮毫・小谷野寛一。(3ページ下段へつづく)



やきものの粘土について

岸道生

飯能では、江戸後期から明治中期まで、矢嵐、白子、原などに窯があり、これらの窯では地元の粘土を使用していました。現在では粘土も宅地の下になりつつあります。

粘土とは、どの様にして出来た粘土が、やきものに使われるのかについて考えてみたいと思います。

まず粘土は、天然の岩石などの鉱物から出来ています。一般にそれらの岩石は、成因(できた)から火成岩、堆積岩(火成岩)、変成岩とに分類されています。

火成岩——地球の内部は、非常な高温で岩石もどろどろに溶け、岩漿となっている。これが地表面に出てきて、冷却固したものを火成岩という。

堆積岩——すでにあった岩石が大気や水などの作用で砕かれ分解されてきたものが堆積し、また流れ運ばれて堆積してできたものを堆積岩という。

変成岩——火成岩でも、一度できてから周囲のはげしい状態変化に会って、初めて変わって岩石となったもの。

熱変成作用——変成作用が、熱によるもの。

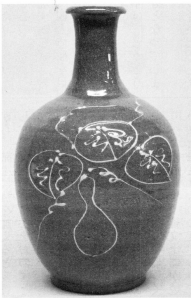
動力変成作用——強い動力によるもの。

大気や水などの力での変化したものは風化と呼んでいます。

やきもの原料となる岩石や粘土は限られていて主なものは粘土。粘土は性質が相違した多種多分がどこにも分布していますが、ある粘土は、利用価値があっても、ある粘土は不純物が多くて使用に適さないといつた相違があります。

粘土は一般に岩石が変質したもので、その岩石(母岩)のそばで、そのまま生成したものと、細砕されて遠くに運ばれて堆積したものとが出来ます。前者を一次粘土(残留粘土)、後者を二次粘土(漂積粘土)といいます。

飯能の粘土は、二次粘土及び火山灰の堆積したものと思われまます。これらの岩石、火山灰が粘土化するまでには、百万年から百五十万年もかかると思われる。



岸道生氏の作品より

素地と素地土杯土、粘土を用いて器物を作りますが、火で焼く前は、その造形物を生素地と呼び、これを作る調整粘土を素地土(粘土)といいます。杯土は単一の粘土から調整する場合と各種の粘土や、細かく粉碎した岩石粉などを配合し、調整したものがあります。私の窯で使用しているのは、単一の粘土

と、岩石粉を配合したものです。やきものになる粘土とは、一、やきもの形を作るために可塑性があること(一度力を加えて変形させると、その力を取り去っても変形したままの形を保つ性質)、のびがよく腰が強いこと。

二、成形された素地は乾燥を行いますが、その乾燥で素地に強さが出て、ひび割れが起つてはいけません。

三、加熱して焼成しますが、焼け締めること。

四、釉はよく掛け、素地に適合して表面をよくおおい、その色調が出て美しいこと。

飯能には粘土が、なん種類もありますが、ほとんどこれらの条件をそなえています。全国の産地の土と比較してもけしおとりません。

一般にやきものは、粘土または粘土に他の物質と水を加え、よく練って空気をぬいて器物を形作り、乾かしてから高い温度で焼いたものです。表面は、ふつうガラス質の釉(うぐすり)がかかっていますが、釉以外の部分を素地といいます。この素地と、釉との組み合わせでやきものを分類できます。

一、素地が多孔隙で吸水性のあるもの。

二、土器——不透光性、無釉(土製植木鉢、かわらけ)

三、陶器——不透光性、有釉(萩、織部、志野、信楽、益子、飯能など全国各地)

四、素地が密質で吸水性が少ない。

一、せつ器——素地が不透光性、有釉、有釉または無釉(万古、備前、常滑焼など)

二、磁器(素地が透光性、白色、有釉(有田、九谷、瀬戸、会津本郷焼など))

これらも区別がつかない場合もあって、同一地方で同じよう

▽出版挨拶および祝辞・市川宗貞市長、加藤一會長、井上紋次郎、山岸雄司、新井清寿、島田欽一、本橋幹治各氏。

▽本文・四氏の研究発表

飯能の板石塔婆——新井清寿

飯能地方のお盆——小谷野寛一

阿寺の相鏡——本橋幹治

「焼き物あれこれ」——双木利夫

▽「各地区だより」——西野長治

島田欽一、浅見徳男、井上峰次、野口正元。

▽初代役員紹介——會長・加藤一、副會長■双木利夫、新井清寿、理事■織戸恒夫、小林雅二、新井幸一、平沼恒夫、事務局■赤田健一、浅見徳男、岡野達雄

◆第二号(S五十四年八月刊)

表紙・明治四十年ごろの飯能河原風景写真。田山花袋の詩「名栗川の谷」抜粋

▽本文・「板石塔婆・2」新井清寿、「罎口抄」清原恒夫、「飯能庚申摺」平沼恒夫、「金工師寿親」細田栄能介

◆第三号(S五十六年五月刊)

通り写真——島田重利氏提供

▽本文・コラム「飯能の俳句」

吉良蘇月、「板石塔婆・3」新井清寿、「久留里城訪問記」西野長治、「飯能の傀儡」山岸雄司、

「振武軍の跡を訪ねて」加藤一

◆第四号(S五十八年九月刊)

表紙・昭和初期の県立飯能高等女学校玄関写真

▽本文・「小瀬戸村郷土史考」

(2ページより)

(4ページ下段へ)

『ふるさと漫録』の出版に当たって

西村一男

郷土の歴史などにはおおよそ縁も遠かった私は、二〇年ほど前のこと、ある大学教授をリターナーとする板碑研究グループの一行に道を訊かれて、房ヶ谷戸の西光寺跡へと案内したことがあった。すると、境内の共同墓地に立ち並ぶ大きな碑の前へいざなわれ、「これが板碑というもので……」と、板碑のもつ本質やその稀少価値などを聞かされたものだった。いまにしてみれば、このときの出会いが私の地域の歴史を覗いてみる入口だったような気がする。


そしてそれ以来、私の板碑への執着心は次第に募っていった。元来が乗り易い性格の私は、これを機会にとことんのめり込んでしまうことになる。

このような経緯があつて、先ず私が抱いた疑問は、「一基でおよそ八百万円から一千万円とも推測される板碑建立の資金源は何だったのか、また、それだけの人物とはいかなる者だったのか、これらを究明、立証しよう」とすれば、当時の世相・産業・経済・軍事・宗教等々へと、多岐にわたつて対象の窓口は必然的に拡がっていくことになる。かつての浅野、鹿戸富吉翁の

語り調には独特のニュアンスがあつて、これを通常の標準語に置き換えてしまうと、この老後師の訥々とした語りもイメージダウンしてしまう。その雰囲気と臨場感を表現するために、採録の折に予め収録してきたテープを少しずつ回しながら、可能な限り原語のまま原稿用紙を

埋めていった。

秩父事件のふるさと探訪



理めていった。「板碑の聖堂」ともなった例の板碑建立の資金源としての(仮説)産鉄立証を狙つたものである」と同時にもう一つ、力説したいことがあつた。それは、原市場地区には非仏教運動による魔寺が多いことから、その運動の起因と結果など、当該地域住人には仏から神へと当該地域の歴史とその功罪を正しく理解し、さらに後世へと伝えて欲しいという希いもあつたからで

ある。

「竜ヶ谷城」、「真野豊後守後裔」にしても伝承と史実との相違点が多く、確たる資料もない。社会の片隅の小さな歴史では、否定も肯定もできないというのが実情であつた。

民俗では「石原の獅子舞」が、成人の日の変更に伴つて獅子の日も流動的となつた。そのため、小正月の諸行事も忘れられてしまわなければよいがと憂慮しているところだ。

「ケツあぶり」にしても、その由来さえ判らなければ当然、その仕来たりも薄らいでいくであろうが、惜しいことである。

歴史的な章では、伝承と史実との相違点など、どの程度まで記述したらよいのか、関係者に失望を及ぼさないよう配慮しながらも、反面、史実を伝えなければならないという矛盾に悩まされながらの執筆であつた。

- 副会長・井上峰次 坂口和子
 ◆第七石(『六十二年六月刊』)
 表紙 石仏・弁財天写真
 ▼本文・「小瀬戸と岡部氏」野口正元、「金山物語」判野史郎
 「羅美童の主は誰か」浅見茂
 「小岩井七不思議めぐり」桑山和子、「松茂申移設記」小山誠
 三、「女性史小話」浅見徳男、
 ◆第八号(『六十二年六月刊』)
 表紙 岩沢、見光寺の宝篋印塔写真
 ▼本文・加治地区特集
 「加治地区の歴史」西野長治、「加治」浅見徳男、「青石塔婆の語る加治地区」岡野達雄、「六十六部」と回國供養塔」坂口和子、「川越歴史散歩」吉田茂、「古文書が語る」新井清寿、随筆「かよい」井上峰次
 ◆第九号(平成元年六月刊)
 表紙 上直竹下分・弁財天
 ▼本文・南高麗地区特集
 「南高麗あれこれ」内野博司、「田安領百姓一揆」岩沢に犠牲者の墓も「吉田靖」、「八王子石炭焼の創始者と歴史」師岡貞雄、「子」の権現と竹寺へ」木村善三
 郎、随筆「竹に思う」大野邦弘
 ◆第十号(日二二年六月刊)
 「飯能」と木材」関根美智子
 表紙 能仁寺蔵・伽羅観音像写真(像は五代親吉の生母桂昌院の寄進とも伝う)
 ▼本文・「丹党の系譜と飯能」岡野達雄、「ケツあぶりの火よ



(飯能市下赤土六一四)

郷土歴史の夜明けは

「高麗郡」設置から

▼Q子ちゃん：飯能に郷土史研究会というのがあるでしょ。どんな人たちが何を研究しているかなおじさん。

▼Aおじさん：飯能地方にはね、むかし大活躍した武士がいたり、江戸時代には農民が一揆（いっき）という暴動を起したり、明治維新のきっかけは飯能戦争が起ったりと、いろいろな大きな出来事があったんだ。そして一般の人たちは生活が苦しいなかで、木材の仕事をしたり、織物の仕事をしたりして生活を守ってきたんだよ。そうした昔の事を掘り起こし、忘れないようにし、合わせてこれからの時代に昔をどう生かしていくか、会員個々が得意な分野で研究しあったり、史跡を訪ねたり、話し合いをしたりしてね。会員は会社社員であったり公務員であったり、農業をしている人もいますし、高齢者の男女もいる。これらの人たちが活動を始めてから、

Q子ちゃんとAおじさんの
飯能の歴史おもしろ問答

おおよそ三十年にもなるんだ。
▼Q子：飯能にも武士がいたのね。その歴史の豊かな地域だったわけね。そのせいかしら、飯能には歴史の関心を持つ人が多いよに思うけど……
▼Aおじさん：そうなんだ。だからなんだろうね「飯能市郷土館」には予想以上に市民の来館者が多い。その郷土館と郷土史研究会は互いに助け合ったり協力しあったりして、館の発展、会の活動の推進など互いにバックアップしているんだよ。
▼Q子：わたしも郷土館へは先生と行ったり、お父さんと行ったり何回も行ったわ。歴史って面白いわね。で、飯能の歴史というのは、いつごろ始まったものなの。
▼Aおじさん：いよいよ本番だね。飯能の歴史の始まりというね、とおおよそ三百年ほど前、飯能や日高、鶴ヶ島周辺の村々が「高麗郡」になった、その頃が歴史の始まりと言っていると思うよ。
▼Q子：ずいぶん昔のことなのね。それで高麗郡っていうのはどうして造られたの。
▼Aおじさん：そうそう、そこが大切なところなんだ。ちよつと難しい話になるけど聞いて

ね。奈良時代の元正天皇皇屯二年、というから西暦七百十六年に、朝廷は隣国「朝鮮の」王國、高句麗（こうくり）から使者の一人としてやって来て、そのまま日本に定住したとみられる王族系の若光（じやうこう）に對し、「王」姓と従五位下という高い位を与えるときにも、「武藏國の一角に渡来人を集め、高麗郡を設置する。よつてその郡長を務めるように」と命じた。



静寂な山頂に眼る若光王
(高麗家の墓)

れた国史「続日本記」(じよく)に「ほんぎ」などに出ていてんだが、あまり文字が発達してない当時のこと、それほど詳細には書かれてはいないな。
▼Q子：その高麗郡の中心地が日高の高麗地区だったというわけね。私たちが毎年正月、初詣で行く高麗神社が高麗郡長の「高麗」のおじさん、そのとおりだ。高麗神社は王若光が亡くなったあと、若光の遺徳をしのんで渡来人と在来人が協力して建立したといわれている。同神社の西方の聖天院というりっぱな寺も若光と渡来人たちの霊をまつたもので、渡来人の高僧が建立したのなんだ。また若光は白髪を生やしていたことから郡内各地に白鬚神社が建立されたとも伝えられている。
▼Q子：すると王若光という人、よほどりっぱな、人望のあった方だったのね。それで今でもあんなにたくさんの方が初詣に行くのね。ただ疑問なのは、渡来人がたくさんいたという理由が分からないんだけど。
▼Aおじさん：当時は日本と中国、朝鮮との往来が頻繁で、特に朝鮮に近いこともあって国内の王國どうしの戦いで破れたりすると、たくさん日本に逃れて来た。高句麗渡来人も戦に破れて日本に来た人たちがんだ。そうして日本に点在

▼Aおじさん：それは当時書か

いつまでも「判野史郎」「酒造」と堂元を訪れて」内野博司。郷土館オオフンのお知らせ。郷土館友の会発表、会長に大野邦弘氏選出
◆第十一号(日・三年六月刊)
表紙◆改築された中居宝蔵寺の全景写真
▼本文◆精明地区特集「精明地区めぐり」講師・島田敏一、法螺貝井上峰次、柳明見、歩き「浅見恭一」徳が喜び、比企地方めぐり「藤村美代、あと、若光の遺徳をしのんで渡来人と在来人が協力して建立したといわれている。同神社の西方の聖天院というりっぱな寺も若光と渡来人たちの霊をまつたもので、渡来人の高僧が建立したのなんだ。また若光は白髪を生やしていたことから郡内各地に白鬚神社が建立されたとも伝えられている。
▼本文◆「小岩井雅楽助と小岩井森家」山影農園、二橋御領地・赤沢村の中堅農民、浅見茂「明治八年ごろの岩沢村の産物と農家の暮らし」西野長治「中国旅行のガイドたち」滝沢充、「随筆」川原町水天宮「富田直美」黒田直邦をとりまく人達」岡野達雄
◆第十三号(日・五年六月刊)
表紙◆諏訪八幡神社境内の丹生神社写真
▼本文◆「飯能の中世城館跡」山影康洋、「八王子城と飯能道間」青木晃平、「武蔵野鉄道開通と二丁目の発展」加藤義雄、

▼Aおじさん：それは当時書か

通と二丁目の発展」加藤義雄、

郷土館
だより12年度の催物ご案内
11年度事業を振り返ると

12年度の催物

- ◆「富山芳男贈作品展」
四月二十九日(土)～五月十四日(日)
- ◆「うちおり展」(仮称)
六月十三日(火)～三十日(金)
- ◆「内田文雄氏町内山車模型展」
七月上旬
- ◆「理蔵文化財出土品展」八月
- ◆「中学生社会科研究展」九月
- ◆「特別展」飯能～戦後のくらし展(仮称)
- ◆「定点撮影プロジェクト2000」
テーマ別撮影の展示を六～七月頃行い、地点撮影は撮影を九月頃、展示を十二月から三月頃予定しています。

郷土館が
あなたを
待ってます

- ◎夏休みの子ども歴史教室
八月上旬
- ◎郷土史関連連続講演会
九月頃
- ◎市民学芸員講座
平成十三年一月中旬～三月中旬
- ◎くわしくは、事前のポスター、チラシ、広報はんのう等でご確認ください。

昨年度の事業報告

- ◆特別展「収蔵品展」美術品を中心にして。三月二十日～五月九日
- ◆「双木本家飯能焼コレクショ」展VII 七月二十日～九月五日
- ◆「特別展」わたしの宝物展 十月十五日～十二月五日
- ◆特別展「飯能スポーツ史」
二月六日～三月二十六日
- ◆「収蔵品展」講演会
一、「蔵原伸二郎と飯能」四月十日 講師 町田多加次氏
二、「平山蘆江と飯能」四月二十五日 講師 森和夫氏
- ◆定点撮影プロジェクト'99
・地点撮影：六月に撮影、七月～九月に展示を行いました。
・テーマ別：六月～八月に撮影、九月に展示を行いました。
- ◎夏休み親子歴史教室



特別展「飯能スポーツ史」展示風景

- ◎今回は自分達で発火道具をつくくり、マイギリとを体験しました。始時代の火起こしを体験しました。八月七日/郷土館 八月八日/吾野公民館
- ◎市民学芸員育成講座
市民学芸員と聴講者の方について 博物館の歴史や展示等について講座を行いました。一月二十九日、二月十一日、三月二十九日と二月六日～三月二十六日の毎週日曜日
- ◎埼玉国体記録映画等鑑賞会
「埼玉ニュース」や「埼玉国体330万人の記録」など昭和四十二年に開催された埼玉国体の記録映画等を鑑賞していただきました。(二月二十七日)
- ◎「再び西川古柳について」吉田靖「赤田喜美男史を憶う」井上峰次(当郷土史研究会創立に大きく貢献、発会後も事務局として地道に活動された歌人赤田喜美男氏の逝去にあたって)
- ◆第十八号(日・十一月刊)
表紙：会館十周年を迎えた飯能市郷土館の全景写真
▽本文・「明治維新の神仏分離と埼玉の現状について」大野邦弘、「こんにやくの話」内野博司、「古文書」浅見徳男、「飯能の古民家」丸山幸雄、「会館十周年を迎えて」宮前幸雄(郷土館館長)。新旧会長あいさつ・井上峰次前会長、坂口和子新会長。
▽小谷野寛「先生を偲んで」山川徳次(当会顧問であり、民俗研究に熱心だった歌人の小谷野寛一氏の逝去にあたって)ほか
▽役員改選・会長、坂口和子副会長、大野邦弘、内野博司、吉田靖、理事・加藤義雄、森田伍助、関根美智子、西野長治、丸山清、青木見平、岸道生、西村一男、浅見徳男、監事・浅見賢治、金子仙太郎。

あとがき

陳腐な表現を借りれば、二十歳といえは立派な成人。とすれば二十号を迎えた本誌「郷土はんのう」もりっぱな大人でなければならぬ。が、現実はどうもままならず、未成熟そのもの「せつかつか会」とその広報の基盤を堅められた加藤一、新井清寿先生ら歴代会長や献身的努力を続けられた方々には申し訳ないと思いつつ、紙面づくりの限界を感慨している今日この頃である。会員の増加による若返りは、会報の紙面充実に切つても切り離せない▼新年度はすくなくとも会員を増やしたい……これが役員一同の悲願のだが、こればかりは役員だけではどうにもならない。ぜひ会員みんなの力を結集、一人でも二人でもいい、新会員を迎えたいものだ。(清流子)

郷土はんのう 第20号
発行日・平成十三年三月二十日
発行所・飯能郷土史研究会
飯能市飯能二五八一
飯能市郷土館内
(〒357-0063)
(電話：七二一四二四)

題字・小谷野 寛一
表紙写真・郷土館提供